



逆 **援交娘**に
- CASE かや -
射精させられたい!!!

(しくじったな…)

仕事帰り、私は駅の出入口で

降り止まない雨をぼーっと眺めていた。

傘もなく、迎えに来てくれるような相手もおらず、

挙句の果てに財布を忘れてタクシーを呼べるわけもなく…

この降りしきる雨の中駆けて帰る余力も無かった。

すると、後ろから歩いてきた女の子が自分の横で停止した。

今時の、不真面目そうな、でも肌は色白で黒髪の女の子。

女の子は何をするわけでもなく、

ずっと私の横でつつたっている。

不思議に思い視線をやると…



「ねーねーおじさん、あたしと一緒に雨宿りしない？」
耳元でそう囁かれ、一本のビニール傘と何かを手渡される。

「雨宿り…？」

「あたし、おじさんのこと買いたいな」
手渡されたのは千円札一枚だった。

「イイコト、しょ？」

「こういうことをするのは、普通、
立場が逆なのではないだろうか…？」

「何かの冗談ならよしてくれ」

「ホテル代私が持ってあげるから、ね、いい？」

「は、はあ？」

私のなんと無様な返答か。



「君はバカなのか？」

「何が？」

「自分のしていること、わかっているのか？」

「んー援交だとあたしがお金もらう側だしー

さしずめ逆援交ってトコ？」

「…」

呆れて言葉も出ない。

「…見慣れない制服だな、親御さんは？」

迎えに来てもらえないからって行って

大人を暇つぶしに使うんじゃない」

「そういうのじゃないんだってばーっ」

「それにーあたしママもパパもないよー」

…地雷を踏んでしまったらしい。



「見たところおじさん、お金がないんでしょ？」

「何で知ってるんだ」

「んー女の勘？」

…鋭すぎるだろう。どこかで見ていたのだろうか。

「千円あれば帰れるでしょ？」

だからちよっとの間あたしに付き合ってよ」

「…」

どうせ財布も何も大事なものなど何も持っていないんだ。

私は千円札を懐にしまった。

ホテルの前まで来てしまった。

女の子はるるんるといった様子で、

なんとというか、浮き足立っていたように見えた。

と、店先で私はあることに気がついた。

「こんな格好でこんなところ来たらずいだろう」
気休めにしかならないだろうが、

私は着ていたスーツの上着を女の子の肩にかけた。

「え、そうなの？」

「…？」

女の子は不思議そうにスーツに袖を通し、ボタンを全てかけた。
見た目と反して割と生真面目なのだろうか？

(黒髪だし？校則か？)

「今から何するか分かってるのか？」

「おじさん、ちょっと鈍感なの？」

やることは分かっているのか。

「期待してるくせにそんなこと言って、信じてないんだ？」

「これからいっぱいイイコトしてあげるよ」

私も女の子も服を脱ぎ…。

お互い過ちを犯すことになった…。

ふふふっ


おじさんの亀頭

ぱくう〜♡♡

あまり乗り気じゃなかったのに
ちんちんは正直だねえ
もうこんながちがち

あたしそういう
素直じゃない
ツンデレなおじさん
ちよっと好きだよ♡

ぱくう〜♡♡



君は、こういふことを
よく知っているのか……？

んー
ナイショってこと
しておこうかな

その方が
みすてりあすっぽこし

今はさあ
そういうあたしの「J」なんて
どうでもございJ
考えないで...

ちんちんの先っぽにくる
気持ちよさだけ
考えてようよ

ね？

しっ
っ
っ



ふふふっ
きもちー？

それとも
こうやって先っぽだけ
ぺろぺろされるの
もどかしい？

でも今日はだーめ
奥までじゅぽじゅぽするのは
また次回ね

じ、次回？

こんなかわいい女の子と
えっちできて
お金貰えるなんて
しあわせでしょ？

次会ったら
またえっちなこと
してあげるよ

っ、次って、
そんな私は
何度も会うとは…

へー
そんなこと
言っちやうんだ？

じゃあ次も会おうって
言うまで…
我慢できないくらい…
先っぽいっぱい
ぺろぺろしちやお



絶対にこれっきりに
するんだからな…ッ！

んふふふっ
表情でバツレバレ…
嘘つかなくてもいいよ

お仕事でお疲れの
おじさんは…
あたしと
きもちーとっころころの



年下の女の子に
甘やかされるの嫌い？
えっちなことされるの嫌い？

おじさんくらいの年齢だと…
あたしとえっちなこと
するなんて
お金払わない限り
無いんじゃない？

もっと
素直になって
いいんだよー

そしたらもっと
気持ちよくしてあげるのは
いいんだよー



うっ、あ……っ

ほろほろほろー
もっと声だしてー
こころはそういう
ところなんだからー

あたしのおくちの中に
いーっぱい
濃い精液、ぶちまけて
いいんだよー

ちゅ

ちゅちゅ

ちゅ

ま

ま

ま

じゅ……じゅ……

ちゅううってされるの
好きなんだあ ♡

いよいよこっちは
ちゅううして
めづる ♡

ちゅ
らら
ちゅん
ん

ちゅん
ん



ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

♡

ちゅっ♡



ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡



んあ？
ちよっと射精した？
なんかにがいよーな
しよっぱいよーな

してない！
してない！！

君のよだれか
が、我慢汁だろ！

…我慢汁？

アハハ...

まーいいや

おじさんの顔

すごくきもちーって

顔してるからあ

ちゅうちゅう

続けるね？

ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡

ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡

「そのまま
この子のペースに……
飲まれてしまおう……」

じい~~~~♡



こんな……じっと
目を見られながら
吸われたら……!!

気持ちよくない
わけがない……!!

あや
か
ん
ちゅ♡
ちゅ♡
ちゅ♡



ちゅ♡
ちゅ♡
ちゅ♡

ちゅ♡
しゅ♡
しゅ♡

んうう？

すっごい苦しそうな

顔してるけど

大丈夫？

いーよー

いっぱい射精してえー

…奥まで…

ふえ？



奥までくわえてくれ……

おじさん

やあっと素直になったね

うれしー

でーもー

それは次回ね

そんな……

今日は先っぽいっぽい
攻めてあげるからあ…

とりあえずイッちやあつか





F

キッス

キッス

キッス

キッス



わーすごーいい♡♡♡
いっぱい射精したねえ

わ、私としたことが…

おじやるプライムド
高いねえ…♡

ズンズン…

ズンズン
ズンズン





きもちよかった？

……

もー素直に言ってくれないと
またぺろぺろして
射精させちゃうよ？

若くないから
射精した後
そうすぐに勃たないよ…

そうなの？

本当に舐め始めた…

んー本当だ
ふにゃふにゃだー
おもしろーいっ

結構この子…
無知なのか？



女の子はひとしきり私の柔らかくなつた陰茎で遊んだ。

(不思議な子だな…)

固くならない陰茎に飽きた女の子は洗面台に行き、私の精液でべたべたになった顔を洗った。

「ぬえー髪の毛についたのおーちーなーいー!」

…調子に乗って申し訳なかった…。

精液と格闘して数十分後、女の子は戻ってくるなり制服のポケットに入っていたケータイを取った。

「そうだおじさん、連絡先」

幸い財布は忘れたがケータイは持っていた。

ズボンの中に入っていたケータイを取り出し

女の子と向かいあった。

…真っ裸でこんなことをしているとは実にマヌケであった。

「おじさんはケータイ持ってるけど

メールと電話にしか使ってないタイプでしょ?」

「バカにしてるのが 実際そうだが…」

「じゃーメールアドレス、交換しよっかー」

女の子は私のケータイを取り、手際よく操作していく。

「はい、入れたよ」

ケータイの画面には見知らぬメールアドレスと

名前が追加されていた。

「かや？」

ひらがな二文字で、そう書いてあった。

「うん、かやっていうの、あたし」

「これからもよろしくね、おじさん」

こうして、私とかやの奇妙な関係が始まってしまった。